

北海道大学

講座の概要

〈各科目の概要〉

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

放送日時 昭和63年10月9日～平成元年1月15日

毎週日曜日 午前5時45分～午前6時30分(北海道放送)

中心的なテーマ	科目のねらい	内 容 ・ 方 法
<p>世界経済の激しい構造転換のなかで、これに適応するために日本経済は大きな転換を迫られている。</p> <p>転換の課程での矛盾や摩擦は避けられない。矛盾や摩擦の激しさは、地方によって異なる。とりわけ苦しい状態に置かれている北海道経済の進むべき道を考える際の原則と展望の方向を明らかにする。</p>	<p>テーマはあくまでも現在の北海道経済なのではあるが、新しい展望を得るためには現在を一度相対化してみる必要がある。そこで現在を過去と未来の接点において、現在の中の現在ではなく過去と未来を見るように努め、同時に北海道を日本の一地方として見るのではなく、日本の全体がそうであるように、世界の波風に直接さらされながら生きている一地域を見ると、展望が得られることを示そうとする。その際に経済学・経営学が判断の足掛かりになる基礎概念を提示出来ることをも合わせて示す。</p>	<p>第1回は経済の最奥の基礎である土地と人口に戻って北海道の持つ可能性を世界の中で考える。第2回は戦後北海道経済の先入観を破るために今日の課題に連なる戦前の経験を探る。第3回及び第4回は近代の北海道の開拓開発の思想と実績の反省から将来へ教訓を探る。第5回はマネーフローの面から北海道経済の総括的な特徴をとらえ、第6回はとりわけ困難な状態に置かれた地域での人々の努力の有り様を示す。</p> <p>第7回は後半の出発点として世界に積極的に乗り出していくための足掛かりとなるという観点から北海道の生活を分析し、第8回は同じ観点から産業技術を分析する。第9回及び第10回は将来に向けて展開していく活力を企業の分野の中から示す。第11回と第12回は、今後の北海道経済の展開のためには特に努力を要する問題領域の中から2つを選び、北方圏経済交流を拡大していく問題と、企業者行動の特性をより積極的なものに変えていく必要について論ずる。第13回は全体のまとめとして地平に明るい曙光を見ようとする。</p>

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 一開かれた教育のために

放送日時 昭和63年10月16日～平成元年1月22日

毎週日曜日 午後9時00分～午後9時45分(北海道放送)

中心的なテーマ	科目のねらい	内 容 ・ 方 法
<p>国民が高い関心を持ち幅広い領域にわたる教育問題について、この講</p>	<p>戦後40余年、高校進学率の著しい上昇、高等教育の拡充などのなかで、国民の教育水準は着実に向上しま</p>	<p>“豊かな人間性の創造一開かれた教育のために”という主題のもとに、就学前教育、学校教育、成人教育というヨコ軸と、家庭(家族)、学校、地域というタテ軸の関連のもとに、全体を3部で構</p>

座ではできるだけ焦点をしばり、“豊かな人間性の創造”という教育の理念を中心テーマにかかげ、その体系的な考察を通じて、国民が教育・学習に主体的にかかわろうとする際に、その判断、活動のよりどころとなるような知見を提示することを目指す。

したが、半面、非行、校内暴力、落ちこぼれ、受験競走、学歴社会など、教育の荒廃とゆがみも浮き彫りになっている。

このような事態を克服し、豊かな人間性を創造する教育を国民が軸となっていくにつくり出すか、そのために求められている教育の役割と新たな可能性について考察する。

その際、何よりも実例を大切にしながら、“就学前教育、学校教育、成人教育”と“家庭(家族)、学校、地域社会”の両面から検討し、相互に関連づけてできるだけ体系的な解明を試みる。

成する。第1部は、家庭を基盤とする就学前教育についての考察である。第1回と第2回では“子供の発達と親子の関係”と題して、この主題にかかわる基礎的考察を行い、さらに第3回では、“子供の成長とゆがみ”について精神医学の立場から解明する。また第4回では子供の発達の条件をより広い視野から社会とのかかわりを中心に分析する。

第2部は、第1部を受けて学校教育について考察する。その取り上げるべき課題は数多いが、ここでは、まず、第5回と第6回で学校づくりのすぐれた実践にもとづいて、創造的な人間形成を目指す学校づくりについて考察し、さらに第7回と第8回では教育内容にかかわる中心課題である学力の問題について、その基本原理とそれに基づく実践をもとに解明する。第9回は第3部への橋渡しの課題として“地域社会と学校”について教育社会学の立場から考察する。

第3部は、“地域社会と教育とのかかわり”が主題である。この点についても取り上げるべき課題は多いが、ここでは、特徴的な問題として、まず第10回で最近盛んになっている地域スポーツに焦点をしばって考察する。さらに、第11回では生涯教育の問題を地域社会における産業・住民生活との関連を重視して、具体的実践事例にもとづいて分析する。

第12回と第13回は、この講座の総括と主題をめぐる今後の課題と展望についてシンポジウム形式で討論し、今後の議論の発展に資することを目指す。

〈各科目の構成〉

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

主任講師：経済学部 教授 荒又 重雄

〃 教授 小林 好宏

〃 教授 黒田 重雄

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月 9日(日)	北海道は「独立」できるか —世界の中の北海道—	経済学部教授 荒 又 重 雄
第 2 回	10月16日(日)	世界に飛びだした人と商品 —北海道産業のなりたち—	北海学園大学経済学部教授 田 中 修
第 3 回	10月23日(日)	どうゆう開発理念が今必要なのか —開発政策の夢と現実—	経済学部教授 小 林 好 宏
第 4 回	10月30日(日)	開拓の歴史が教えているもの —開発理論からみた北海道農業の 課題—	農学部教授 天 間 征
第 5 回	11月 6日(日)	算盤をはじいて北海道を診断する —マネー・フローからみた北海道 経済—	北海道拓殖銀行常務取締役 石 黒 直 文
第 6 回	11月13日(日)	地域は不況にどう挑戦しているか —創意工夫の地域活性化—	文学部助教授 金 子 勇
第 7 回	11月20日(日)	生活の知恵の北海道らしさは —生活に根ざした開発のために—	経済学部教授 黒 田 重 雄
第 8 回	11月27日(日)	「生産技術」が不足している —安定品質、短納期、低価格—	経済学部教授 関 口 恭 毅
第 9 回	12月 4日(日)	北海道企業の成長戦略はなにか —二つの実態調査分析から—	経済学部教授 真 野 脩
第10回	12月11日(日)	企業は不況にどう挑戦しているか —中小企業と企業家たち—	北洋相互銀行経営管理部 調査広報担当部長石 川 友 俔
第11回	12月18日(日)	経済国際化の活路はどこに —北方圏経済交流の可能性—	経済学部教授 所 哲 也
第12回	12月25日(日)	経営の地域特性は何を語るか —北海道経営文化の課題—	経済学部教授 富 森 虔 児
第13回	1月15日(日)	地平に曙をみる —北海道経済の可能性—	経済学部教授 小 林 好 宏 〃 教授 荒 又 重 雄

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 ―開かれた教育のために―

主任講師：教育学部 教授 山田 定市

〃 教授 鈴木 秀一

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月16日(日)	子供の発達と親子関係 I	教育学部教授 三 宅 和 夫
第 2 回	10月23日(日)	子供の発達と親子関係 II	〃
第 3 回	10月30日(日)	子供の成長と歪み ―精神医学の立場から―	北海道教育大学札幌分校教授 奥 村 晶 子
第 4 回	11月 6日(日)	子供の発達と家庭環境 ―社会とのかかわりを中心に―	札幌学院大学人文学部教授 布 施 晶 子
第 5 回	11月13日(日)	創造的な人間形成を目指す学校づくり I	教育学部教授 鈴 木 秀 一 〃 助教授 小 出 達 夫 元恵庭市島松小学校校長 桂 元 三
第 6 回	11月20日(日)	創造的な人間形成を目指す学校づくり II	教育学部教授 鈴 木 秀 一 〃 助教授 小 出 達 夫 北星学園余市高等学校教頭 深 谷 哲 也
第 7 回	11月27日(日)	真の学力をつくる授業 I	教育学部教授 高 村 泰 雄
第 8 回	12月 4日(日)	真の学力をつくる授業 II	〃
第 9 回	12月11日(日)	地域社会と学校	教育学部助教授 小 林 甫
第10回	12月18日(日)	地域スポーツの創造	教育学部助教授 三 好 洋 二
第11回	12月25日(日)	地域に根ざした生涯教育	教育学部教授 山 田 定 市
第12回	1月15日(日)	シンポジウム I 主題＝豊かな人間性の創造 ―その課題と展望―	教育学部教授 狩 野 陽 雄 〃 教授 美土路 達 雄 札幌学院大学商学部教授 田 中 一
第13回	1月22日(日)	シンポジウム II	教育学部教授 鈴 木 秀 一 〃 教授 山 田 定 市

〈スクーリング〉

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

地区名	会 場	第 1 回	第 2 回	第 3 回
		実施日時	実施日時	実施日時
札幌	北海道大学 (学術交流会館)	11月 4日 (金) 18:30~20:30	12月 9日 (金) 18:30~20:30	1月13日 (金) 18:30~20:30
旭川	旭川市中央公民館	11月 1日 (火) 18:30~21:00	1月10日 (火) 18:30~21:00	
函館	函館市民会館	11月17日 (木) 18:30~21:00	1月13日 (金) 18:30~21:00	
帯広	帯広市民会館	11月18日 (金) 18:30~21:00	1月13日 (金) 18:30~21:00	
留萌	留萌市中央公民館	11月 9日 (水) 18:30~21:00	1月11日 (水) 18:30~21:00	
北見	北見市民会館	11月 2日 (水) 18:30~21:00	1月11日 (水) 18:30~21:00	

(参考) ○スクーリング担当講師及び講演テーマ

地区名		実施日	講 師	講 演 テ ー マ
札幌	第 1 回	63.11. 4	北海道拓殖銀行常務取締役 石 黒 直 文	おカネの流れからみた北海道の歴史 —その発展の方向—
	第 2 回	63.12. 9	経済学部 教 授 所 哲 也	国際貿易はなぜ我々を豊かにするか
	第 3 回	元 1.13	経済学部 教 授 真 野 脩	北海道企業の成長戦略
旭川	第 1 回	63.11. 1	農 学 部 教 授 天 間 征	日本農業の国際化と北海道農業の進路
	第 2 回	元 1.10	経済学部 教 授 富 森 虔 児	北海道経営文化の課題
函館	第 1 回	63.11.17	北洋銀行経営管理部 部 長 石 川 友 俣	最近の経済情勢と道内中小企業の経営
	第 2 回	元 1.13	経済学部 教 授 荒 又 重 雄	行手のどこに北海道経済の灯をみるか
帯広	第 1 回	63.11.18	文 学 部 助教授 金 子 勇	地域活性化の方向と課題
	第 2 回	元 1.13	経済学部 教 授 関 口 恭 毅	情報技術と戦略経営

留 萌	第 1 回	63.11. 9	経済学部 教 授 黒 田 重 雄	北海道の消費者
	第 2 回	元 1.11	荒 又 重 雄	行手のどこに北海道経済の灯をみるか
北 見	第 1 回	63.11. 2	富 森 虔 児	北海道経営文化の課題
	第 2 回	元 1.11	経済学部 教 授 小 林 好 宏	北海道開拓の過去・現在・未来

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 一開かれた教育のために一

地区名	会 場	第 1 回	第 2 回	第 3 回
		実施日時	実施日時	実施日時
札 幌	北 海 道 大 学 (学術交流会館)	11月 7日 (木) 18:30~20:30	12月15日 (木) 18:30~20:30	1月18日 (水) 18:30~20:30
旭 川	旭川市中央公民館	11月10日 (木) 18:30~21:00	1月19日 (木) 18:30~21:00	
函 館	函 館 市 民 会 館	11月21日 (月) 18:30~21:00	1月27日 (金) 18:30~21:00	
帯 広	帯 広 市 民 会 館	11月29日 (火) 18:30~21:00	1月19日 (木) 18:30~21:00	
留 萌	留萌市中央公民館	11月16日 (水) 18:30~21:00	1月25日 (水) 18:30~21:00	
北 見	北 見 市 民 会 館	11月16日 (水) 18:30~21:00	1月20日 (金) 18:30~21:00	

(参考)○スクーリング担当講師及び講演テーマ

地区名		実施日	講 師	講 演 テ ー マ
札 幌	第 1 回	63.11.17	教育学部 教 授 鈴 木 秀 一	学校を甦えらせるもの
	第 2 回	63.12.15	札幌学院大学人文学部 教 授 布 施 晶 子	子どもの発達と家庭環境 —社会とのかかわりを中心に—
	第 3 回	元 1.18	北海道教育大学札幌分校 教 授 奥 村 晶 子	子どもの成長と歪み —精神医学の立場から—
旭 川	第 1 回	63.11.10	教育学部 教 授 山 田 定 市	現代社会と生涯教育
	第 2 回	元 1.19	教育学部 助教授 小 林 甫	学校をめぐる諸問題
函 館	第 1 回	63.11.21	教育学部 教 授 高 村 泰 雄	豊かな学力の創造

北海道大学

	第2回	元 1.27	教育学部 助教授 小 出 達 夫	子どもの人権と学校
帯 広	第1回	63.11.29	鈴 木 秀 一	学校を甦えらせるもの
	第2回	元 1.19	教育学部 教 授 三 宅 和 夫	現代社会における家族と子ども
留 萌	第1回	63.11.16	山 田 定 市	現代社会と生涯教育
	第2回	元 1.25	教育学部 助教授 三 好 洋 二	地域社会とスポーツ
北 見	第1回	63.11.16	北星学園余市高等学校 教 頭 深 谷 哲 也	いま高校教育にのぞまれるもの
	第2回	元 1.20	山 田 定 市	現代社会と生涯教育

スクーリング参加状況

地 区 名	回 数	テ レ ビ 講 座				ラ ジ オ 講 座			
		1	2	3	計	1	2	3	計
札幌 (学 術 交 流 会 館)		88	84	92	264	95	68	79	242
旭川 (旭川市中央公民館)		23	15		38	25	20		45
函館 (函館市市民会館)		14	11		25	15	10		25
帯広 (帯広市市民会館)		19	16		35	13	10		23
留萌 (留萌市中央公民会館)		21	13		34	18	9		27
北見 (北見市市民会館)		18	16		34	15	17		32
計		183	155	92	430	181	134	79	394

〈再視聴〉

地区名	会 場	再 視 聴 実 施 日 時	
		テ レ ビ 講 座	ラ ジ オ 講 座
札幌	北海道大学 (放送教育事務室)	10/12～12/21の毎週水曜日 及び1/11(11/23の分は11/24) 14:00～17:00 18:00～19:00	10/18～1/17の毎週火曜日 (ただし、1/3は除く) 14:00～17:00 18:00～19:00
旭川	旭川市中央公民館	18:00～19:30 3回予定 (詳細は市中央公民館から通知)	18:00～19:30 3回予定 (詳細は市中央公民館から通知)
函館	函館市亀田 福祉センター	隔週火曜日 17:30～19:00 (詳細は市教育委員会から通知)	隔週火曜日 17:30～19:00 (詳細は市教育委員会から通知)
帯広	帯広市百年記念館	実施日時は市教育委員会から通知	実施日時は市教育委員会から通知
留萌	留萌市中央公民館	月～金曜日 9:00～16:00 (詳細は市教育委員会から通知)	月～金曜日 9:00～16:00 (詳細は市教育委員会から通知)
北見	北見市民会館	毎週土曜日 13:00～20:00 (詳細は市中央公民館から通知)	毎週土曜日 13:00～20:00 (詳細は市中央公民館から通知)

〈研究会 (学習会)〉

札幌地区を除く各学習指導地区では、スクーリングのほかに市教育委員会が主催する研究会(学習会)が開催された。

研究会(学習会)では、チューター(学習指導員)が講演及び学習の指導助言を行った。

○研究会(学習会) 学習指導員及び講演テーマ

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

地区名		開催日	学習指導員(チューター)	研究会(学習会)テーマ
旭川	第1回	63.11.21	旭川大学 教 授 米 浪 信 男	地域活性化の決め手は何か —地域の情報化について—
	第2回	63.12. 5	〃	〃 —リゾート開発について—
函館	第1回	63.10.18	北海道教育大学函館分校 講 師 加 藤 晃	特にテーマ等は決めておらず、研究会 開催日まで放送された各回の内容につ いて講師と受講生が対話、質疑応答を 行っている
	第2回	63.11. 1	〃	
	第3回	63.11.15	〃	
	第4回	63.11.29	〃	
帯広	第1回	63.11. 4	北海道開発問題研究調査会帯 広事務所長 横 谷 優 一	地域経済の可能性 Part 1
	第2回	63.12.13	〃	〃 Part 2

留 萌	第 1 回	63.10.26	留萌信用金庫 常務理事 山 田 良 一	地域活性化を考える
	第 2 回	63.12. 7	〃	〃
北 見	第 1 回	63.10.18	北海学園北見大学 学 長 桃 野 作次郎	第 1 次産業活性化の課題
	第 2 回	63.12. 2	〃	明日を担う経営者能力をどう培うか

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 一開かれた教育のためにー

地区名		開催日	学習指導員(チューター)	研究会(学習会)テーマ
旭 川	第 1 回	63.12. 6	北海道教育大学旭川分校 教 授 小田切 正	子どもの発達と家庭・社会 その 1
	第 2 回	元 1.24	〃	〃 その 2
函 館	第 1 回	63.10.25	北海道教育大学函館分校 助教授 大 坪 嘉 昭	特にテーマ等は決めておらず、研究会 開催日まで放送された各回の内容につ いて講師と受講生が対話、質疑応答を 行っている
	第 2 回	63.11. 8	〃 助教授 青 木 剛 士	
	第 3 回	63.11.22	〃 助教授 大 坂 治	
	第 4 回	63.12. 6	〃 助教授 山 崎 正 吉	
帯 広	第 1 回	63.11. 7	帯広市教育委員会社会教育 専門指導員 黒 沼 友 一	教育の活性化を求めて Part 1
	第 2 回	63.12. 8	〃	〃 Part 2
留 萌	第 1 回	63.11. 2	留萌市教育委員会 教育長 本 間 孝 平	豊かな人間性の創造
	第 2 回	63.12.14	〃	〃
北 見	第 1 回	63.10.26	北海学園北見大学 教 授 落 合 信 幸	親と子の関係
	第 2 回	63.12.14	〃	能力とはいかに考えるべきものか

研究会（学習会）参加状況

地区名	回数	テレビ講座					ラジオ講座				
		1	2	3	4	計	1	2	3	4	計
旭川		15	13			28	12	12			24
函館		8	7	6	7	28	7	5	5	5	22
帯広		15	16			31	10	12			22
留萌		14	9			23	15	7			22
北見		15	16			31	15	15			30

実施報告

(1) 実施責任者報告

北海道大学 言語文化部教授 本田錦一郎
(放送教育委員会委員長)

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

北海道大学放送講座も本年で6回目を完了。今回もこれまでの方式に従い、北海道大学放送教育委員会が「大学教育の社会的開放」、あるいは、社会的要請としての「生涯教育」の一環という基本使命のもとに、慎重に討議をかさね放送テーマを決定し、それを実施した。

北海道大学放送教育委員会は北大の全部局を9つのブロックに分け、各ブロックからの委員、それに学長が必要と認めた委員、計12名で構成されている。これに北海道放送（HBC）からラジオ・テレビ番組制作責任者、北海道教育庁社会教育課及び本学事務局関係者が加わり、計8回の委員会を開催した。その他、ラジオ・テレビそれぞれの専門委員会に関してはかなりの回数にのぼった。

討議の内容は普通、3つの柱からなる。1つは総合大学としての大学からの提案（これは毎回行ってきた受講生へのアンケート調査内容や教養部で実施された総合講義のテーマ等の実績を十分に考慮した上での提案）である。これに対し、第2はHBC側からのラジオ・テレビのメディア特性の立場からみた具体的な助言であり、第3は北海道教育庁側からの社会教育的観点に拠る希望である。この3つの立場を軸に、全体的企画が生かされてきた。

また、本学放送講座を実施するにあたっては、北海道、北海道教育委員会及び札幌、旭川、函館、帯広、留萌、北見の各市教育委員会の後援をうけ、各地方における広報活動のみならず、学習センターの開設（再視聴）、スクーリングの実施、学習会等に全面的なお力添えをいただいた。

2. テーマの選定とそのねらいについて

北海道大学放送講座も6回目を迎え、テーマの選定とねらいに関しても、十分、展望可能な状況となっている。ラジオ講座としては、今日、どうしても避けて通れない〈教育問題〉を主要テーマとして取りあげ、テレビは、昭和62年度の「文化としての北—北海道の地方性を問う」の結論の延長線上で、しばしば問題となった〈北海道経済問題〉が取りあげられることになった。

前者では、日本だけでない、いまや普遍的なテーマでもある人間教育の在り方が、激動する時代の中、北海道という一地方で、どのような思想のもと、どのような具体的方策が試みられ、それがいかなる結実過程をたどっているかが問題とされた。

後者では、どん底の北海道経済に希望のよりどころがあるとすれば、その方向性は那邊にあるか、いわば、現在の北海道では、もっとも厳しい、現実に即応した課題に挑戦していただいた。ものごとを悲観的に見ることは、意外とやさしい。その未来に何等かの光を模索する営み、

ここに英知を結集した次第である。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

ラジオでは、主任講師のイントロダクションのあと、講師の独演形式と、数人の講師による対話形式をとった。話題は、時にテキストに即し、時にテキストを離れ、講師の思考し試みてきた理論と実際が紹介され、今日的状況の中での教育の難しさを説きほぐす努力がはらわれた。しかし、テーマの難しさと比例して、時おり難解な解説があった印象もまぬがれがたかったかもしれない。

他方、テレビでもテキストは独立した読み物として、読み通せるよう工夫されたが、ラジオと異なり、メディアの特質を十分に生かして、時に映像で悟らせ、時に第一線に活躍する経済人の話など折りこみ、北海道経済の厳粛な状況を理解していただくかたわら、その打開の道を模索する方法がとられた。結論で、「地平に曙をみる」と題されているところに、このテレビ番組の一貫したねらいのすべてがあった。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

放送講座受講後の受講生の反応は、現在なお調査中であるが、ラジオ、テレビともにかなりの興味をもって視聴していたと推測される。

また、スクーリングについても、寒さと雪の中をスクーリングに参加した受講生の熱心さと、講義終了後の質問の質の高さから、講師と受講生の関係をこえて、お互いに求めあう者同志の共感と共鳴を深めあった、と云って過言ではない、と考えられる。

5. 印刷教材の作成過程について

例年のことであるが、放送教育委員会で講師が決定されると、各講師にテキスト原稿を依頼するが、原稿はラジオ・テレビのそれぞれの専門委員会で、文体の統一や図表内容等を検討し、加筆あるいは修正が加えられたり、その章によっては、講師に原稿が戻され書き直しを求めることもある。

従って、最初の講師から提出された原稿と再度提出の原稿とかなり違う場合もおこりえた。

筆者校正は、基本的には、初校のみで、2校、3校は専門委員会が行うため、時間的にも余裕がなかったり、責任も重く、可能範囲での文体の統一や内容の加筆の業務も加わり、デリケートな一面が出てくる場合も現実にはかなりあった。

ちなみに、今回はとくにラジオに関して、放送教育委員会側からの発言が活発で、それを集約整理していく専門委員会の苦労は並大抵のものではなかった、と推定される。

6. 学習指導の実施状況について

次の三通りの学習指導がおこなわれた。第一は再視聴センターの設置、第二はチューター（学習指導員）による講演および学習指導（2～5回）。第三は講師自身によるスクーリング（2～3回）である。

いずれの場合も、6会場（札幌、旭川、函館、帯広、留萌、北見）を利用し、講義理解の深

化がはかられた。

ラジオ講座もテレビ講座も出席者から熱心な質疑が多く出された。これは、ラジオもテレビも共にテーマが何等かの形で、自分の家庭における子弟教育、経済生活と密接に関連していたことに拠っていると考えられる。言うまでもないことだが、講師陣の熱意も、当然、そこに反映されていたとみるべきであろう。

しかし、実施時期が10月～1月となるため、寒波や雪害等により受講生の数が限られるのは、やむをえないところであろう。いつの世でも、このたぐいの価値判断は、量より質の問題で、小さな輪からやがて大きな輪へと拡がる性質と考えなければならない。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

放送講座が徐々に道民に定着しつつあると思われる。それは例えば、テレビ講座が午前5時45分～6時30分という時間帯の不利な変更をみても、それなりの視聴率をあげていることでも理解されよう。

他方、地方自治体が社会教育の一環として積極的にこれに取り組んでいる姿勢も、あずかって力があると思われる。

しかし、急速に進む情報化社会の中で道民の要望に答えつつけることは、必ずしも容易ではない。すなわち、放送講座を通じて、いかにして高いレベルのものを視聴者の血肉になるようにして与えることができるかが問われている—ということである。

さらに、道民の求めているテーマを、どのような方途で発足し、選ぶかについても、細心の配慮が求められなければならない、と苦慮している現状である。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

一般市民向けを意識して「面白さ」だけを強調したものを、私どもはあえて避け、手法の点で、あるいは、語りの点で、いかに平明かつ日常的であっても、学問としての志の高さだけは失いたくない、という願望をもちつづけた。

そのような意図が少しずつ結実して「大学授業用」としての要請がすでいくつか申し入れられてきていることは、昨年同様であるが、実際問題として、例えば北大の一連の講義(素材)として採択されることも、それほど、遠い将来の出来事とは思えない。現実にはその動きがあることも紹介しておきたい。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

北大の放送公開講座は視聴率をみても、またアンケート調査(現在進行中)をみても、一応成功を収めたといえよう。

しかし、以下に述べるいくつかの難点を内包していることも忘れてはならない。

1. 視聴しやすい放送時間帯の確保。とくにテレビ放映の時間帯。
2. 従来の道民対象の放送講座は、将来全国レベルでどのように生かされていくのか。(わたしどもは常に個を通して普遍への視線を失わなかったはずなのだから。)
3. 「北海道大学」放送講座をいかにして「北海道」大学放送講座に発展させることができる

か。(注：実質は、他大学、その他多くの分野での識見ある人々の協力を仰いでいる現実ではあるが一。)

4. 主任講師の負担をいかに軽減すべきか。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

主任講師：経済学部教授 荒又 重雄

日本経済が全体としてめざましい発展を見せている中で、経済力の過度の首都圏集中が多くの問題を生じさせているのは言うまでもない。このことの裏面には、立ち遅れている地域の経済が崩壊の危険に瀕しているという事実がある。北海道は、沖縄県と並んで、独自の省庁たる北海道開発庁をもっててこ入することの必要性を長く認められてきているほどに、立ち遅れの目立つ地域である。日本全体がオイルショックを乗り越え、円高を乗り越え、近年の内需拡大の動きの中で一層の発展の勢いを見せているにもかかわらず、北海道は未だ停滞の中にあるといわねばならない。

この事実、ここある道民の憂慮するところであって、北海道大学放送講座の開始以来、受講生のアンケートにはいつも、地域経済問題の講座の開設を強く希望する声が反映されていたものであった。今回のテーマは、前回の「文化としての北」というテーマを引き継ぎながら、地域住民の需要に応えるべく企画されたものであった。これまでの大学講座の受講生が、高齢男子と主婦層を有力な成員としていることの当否はともかく、今回は、経済活動の現役の中堅層・実年層の受講を期待して、企画を勧めた。

企画の出発点のキーワードを「北海道経済の過去と将来」とし、現在をただ静止的な現在として眺めて暗いイメージに埋没するのではなく、現在の中に過去の積極的・消極的遺産を見、また同時に様々な将来の萌芽を見てとって、明るい希望を発見していくことを目指した。最終的には標記の題とし、最終章を「地平に曙を見る」とした。問題をいたずらに政治化し、意見の対立を激化して、しかも個々の住民の立場に立った時の手詰まり状態を引き起こすことを避け、受講生のそれぞれが自分の努力の範囲内に目標を発見できるように、しかし、とりわけ責任の重い立場にあるのが企業家たちであり、その創意が期待されていることを示すよう努めた。

講師陣を編成する段階から、着実な調査活動を続けていることで高く評価される地元銀行からの2名の銀行家に参加願った。それぞれに極めてアカデミックなスタイルの原稿と講義とを頂戴できて感謝している。また、テレビの画面に登場してもらうために、中央官庁、地元の経済界はじめ多くの方々に取材に応じていただいた。その中には、かならずしも積極的役回りではなく、時折は批判の対象として扱われる役になってしまった例もある。そうしたケースをも含めて、北海道の経済の発展を願う企画への好意的参加であったと理解し、深く感謝している。そのお蔭で、テキストに書き込んだ論理は、期待以上に豊富な画面となって、地元の期待に応えたものとする。

今回の企画の実施に当たって、様々な意味で、チームの生産性を考えさせられることが多かった。3人の主任講師によるかなりの回数に亘る企画会議、全体企画にあわせながらもそれぞれの持ち味を生かしてくれた講師陣の協力、議義の理論的骨組みをあくまでも尊重しながら、ニュース・ドラマの製作者あるいは放送記者としての自身の材料を惜しみ無く投入してくれた北海道放送の製作陣の努力、まさにそれらの総合された成果として、今回の結果があった。もちろん、現実の経済が要請しているものとの関係で言えば満足は出来ないが、大学側の實力からすればまずまずであろうし、それなりの評価が視聴者の中から得られたものと、とりあえずほっとしている次第である。

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 ―開かれた教育のために―

主任講師：教育学部教授 山田 定市

今日、教育問題に対する国民の関心と要求はきわめて高くなっているが、それは、一面では、戦後40年、高校進学率の著しい上昇、高等教育の拡充などによって国民の教育水準が着実に向上し、そのことを基礎にして国民の教育に対する要求がさらに高まってきていることを示すと同時に、他面では、非行、校内暴力、落ちこぼれ、受験戦争、学歴社会など、教育の荒廃とゆがみが浮き彫りになり、教育改革が問われる状況を反映している。

このような状況ともかかわって、これまでの数次にわたる本学放送教育委員会の調査においても、講座で取り上げるべきテーマとして絶えず教育問題が上位に位置しており、その取り上げ方を慎重に検討してきた。今年度、教育問題をラジオ講座として取り上げることになったさい、まず、留意したことは、安易に速効的な「処方せん」を目指すのではなく、教育問題について受講者が自らの問題として受け止め、主体的に考えるさいに手助けとなるような素材と論点を提示すること、そのさい、出来るだけ具体的な実戦事例を重んずることであった。このような視点にたって、教育をめぐる困難な事態を克服し、豊かな人間性を創造する教育を国民が軸となっていかに作り出すか、そのために求められている教育の役割と新たな可能性を探ることを主眼とした。

そのための分析枠として、タテ軸に就学前教育、学校教育、成人教育という人間の発達段階に対応した教育を据え、さらにヨコ軸として家庭(家族)、学校、地域社会、という教育の展開の場を設定し、その交わりのなかに教育問題の体系的解明を意図し、全体の講座も、このような観点からおおむね3部構成とした。講師陣の編成にさいしては、本学教育学部を中心に学外からも最適任者の協力をうることができ、魅力的な内容にすることができた、と思っている。さいわい、受講者の熱心な聴講・参加のもとに研究・討議も充実した内容となった。

さらに、このような講座の進行状況を踏まえて、最後の2回はシンポジウム形式とし、そこで11回にわたる講義で提起された内容を総括し、この講義の主題である“豊かな人間性の創造”について、より広い視野に立ち、その課題と展望について長期的・国際的視野から広く議論することを目指した。実際に議論の中心になったのは高等教育、とりわけ大学教育についてであった。これは大学生の主催する講座でありながら、個々の講義の中では大学教育について十分に展開できなかったテーマであったこともあり、それを補う意味もあったが、議論はシンポジウ

ムのために新たに3人の講師を迎え、活発に展開された。とくにそのなかで人類社会の進歩における大学の先進的役割、地域に根ざした大学の役割が論じられ、“地域＝大学”を理念とする大学づくりについて実践にもとづく熱気あふれた議論となったのが印象的であった。

13回という限られた枠のなかで論ずるには教育問題はあまりにも大きく奥深い課題である。この講座の成果を踏まえて、教育科学をさらに前進させたいと思う。

制作報告

(1) 制作責任者報告

北海道放送報道制作局次長 守分 寿男

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

大学が「講座」として構成した13回の内容を、その知的レベルを落さず、いかに分かり易く、且つ正確に伝えることができるか。その点を基本方針の原点と考えている。

次に、その「伝え方」であるが、その内容をただ単に映像的、音声的になぞりながら説明していくという方法ではなく、絶えず「活字メディア」と「視聴覚メディア」との本質的な違いを意識し、テキストの具体化と講師の人間的な魅力の表現を心がけるよう努力している。

このためには、制作に入るまでに内容の理解、講師との交流などを含めて1年乃至1年半の準備期間が必要で、そのためのスタッフの固定等、これまでの経験を活かしながら、現状ではほぼ十分な協力関係にあるといえる。

ちなみに、今年度のラジオ講座は構成の段階で20回を超える打ち合わせが行われ、テレビ講座は2年半にわたる準備期間のうえで実現されたものである。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

本年度のテレビ講座のテーマは「北海道経済の地平をさぐる」。

経済の激しい構造転換のなかで北海道経済の過去から現在を分析し、未来を洞察していく訳だが、特に過去の現実に対する認識面で、各講師の話が重複あるいは、統一性を失わないよう入念な打ち合わせを重ねた。

又、経済理論と実経済の格差を極力短縮するため、講師の先生方に積極的に現場に出ていただき命題にアプローチしたのも大きな特徴である。

こうした方法で理論を具体化していく一方、逆に映像の面では表現の目的が違う場合には、例え同じ素材でもそれを再編して使用することにした。

更に、スタジオのセットの面では、講師の日常の生活空間である研究室の雰囲気をかもし出すためデスク、書棚、資料等を配置し、講師が取材した具体的な品物を多数スタジオに持込み、自然のままの講師の人柄や生の雰囲気を活かすようにした。

全体の構成では客観的な事実は一ナレーターを使ったり、講師の現場レポートなどをおりませ多角的な展開を心がけた。

ラジオ講座のテーマは「豊かな人間性の創造～開かれた教育のために～」でいわゆる生涯教育の問題である。

幼児から老年まで、教育の問題を単なる教育理論、教育技術の面からではなく、教育の現場、及び道内各地の社会的な実践の場から様々なケースを取りあげ、問題点を考えながら構成していった。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

テレビ講座に関しては、視聴者の対象を30代、40代の中堅層にしぼり、実学的な面を重視しながらの展開を試みた。経済展望という現在の北海道で最も大きな関心を集めているテーマであるうえ、受講者の希望に応じたテーマでもあったので、視聴率についても期待したが、午前5時45分という早期の放送時間だったために、残念ながら前半には及ばなかった。

しかし、番組の内容に関するものや、「早朝のため番組を見逃したのでビデオを見る方法はないか」などの問い合わせが多くあった。

又、各地のスクーリングでの反応も良く、受講生と講師の質疑も活発だった。このほか、今回の講座に対する道内各大学の評価も高く、テープの教育利用の申し込みもあった。

ラジオ講座に関しては、生涯学習への高まりの中、身近な教育の問題であるだけに、関心度は前年よりは高かったように思う。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

今回、テレビの放送時間が、毎週日曜日の早朝5時45分から6時30分という時間帯であった上、北海道でも寒い時期であったため、視聴率は前回を超えられなかった。放送時間の設定について再検討しなければならない。

又、毎回提起している問題であるが、ビデオ視聴を志向していくとすれば、その方向も著作権の問題を含め検討していく必要がある。

ラジオの問題では、少しでも多くの聴取者を確保するため、番組宣伝も含めバックアップ体制（道教委などの）を固めたい。

いずれにしても、今後とも質的に充実した番組づくりを進めていくため、予算上の配慮が望まれる。

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 北海道経済の地平をさぐる

制作担当者：北海道放送映画社番組制作部 吉田 豪介

本年度の北海道大学放送講座は「北海道経済の地平をさぐる」というテーマである。この講座が始まって間もなく、受講生のアンケート調査で「北海道経済について取り上げてほしい」という多数の希望が寄せられた。こうした希望に応える形で今回のテーマが設定された。

折から北海道経済は、戦後開発の歴史の中で特筆すべき困難な局面にさしかかっており、このテーマの設定は極めてタイムリィではあったが、それだけ困難な命題でもあった。北海道の活性化対策に取り組んでいる「北海道開発審議会」のメンバーでもある講師の一人は「テレビ講座でこのテーマを全うできれば、開発審議委員の仕事から開放されるのに……」と本音とも冗談ともつかぬ心境を吐露していた。

今回の企画は「北海道経済の過去と未来」というキーワードからスタートした。しかし、制作スタッフが取扱うのは専ら現在ということになる。その現在の北海道経済は、基幹産業であ

る農業は減反に次ぐ減反に加え、農産物の輸入自由化の荒波に翻弄され低迷している。漁業も年々、世界の漁場が狭まり「育てる漁業」への転換を余儀なくされている。更に、かつて北海道経済を支えてきた石炭産業、鉄鋼、造船業は国際的な構造不況の洗礼を受け出口の無いトンネルの中にいる状態である。

そうした現在を静止した姿ではなく、瞬間として、過去と未来とが接している時点として考え、厳しい現在の中に明るい未来を見出していこうというのが今回の試みである。

講座の第一回で「北海道は独立できるか」というテーマを掲げ、世界の中の北海道の位置と実力の検証を試みた。そして、北海道の開発理念は、資源の供給を主体としていた明治初期以来、基本的に変わらなかったこと。マネーフロー、資金の流れから北海道経済を分析すると、膨大な赤字体質であることなどを実証してきた。

「北海道には2人のカミがいる。一人は豊かな自然の恵みをもたらしてくれる神。そして、もう一人は開発資金を投入し、域際赤字を補てんしてきたお上、国である」という指摘。こうした国に依存してきた北海道経済の歴史を検証しながら、北海道経済の自立、活性化のための様々な試みを映像化し、北海道経済の可能性を探ってきた。

今回の視聴者の対象を30代、40代の中堅層にしぼったこともあり、具体的で実学的な要素もふんだんに盛り込み番組を構成した。

一次製品の供給だけでなく、それに如何に付加価値をつけていくか。リゾート開発など広さや原始との共存といった北海道の特性を生かしていく道の模索。生産技術の向上と広く世界に市場を開拓し、最も脆弱な二次産業を育成していくことの必要性。新千歳空港の国際エアカーゴ基地構想など、全く新しい分野への挑戦等々、色々なテーマ、課題が提起された。

今回の放送講座のテーマの原案は「北海道経済の地平に曙をみる」だった。それだけに地元の大学で経済を研究し、又、経済界で実務にあたっている講師たちは、厳しい現実から明るい展望を見出そうと現場に足を踏み入れ実践的な検証、分析を行ない北海道の可能性を示唆した。

しかし、実際に「北海道経済の地平に曙を見た」のか、願望が先行したのか、その結論を出すまで今少し時間が必要である。

(ラジオ科目) 豊かな人間性の創造 一開かれた教育のために一

制作担当者：北海道放送ラジオ局制作部副部長 白野 弘子

昭和63年度「北海道大学放送講座」のテーマは、「豊かな人間性の創造一開かれた教育のために一」であった。この講座は、教育の問題を、理論、技術の面からだけでなく、教育現場からの実際、道内各地の創造的人間形成を目指した実践的学校作りの報告など、さまざまなケースを取り上げながら、教育の役割と新たな可能性について、そこから学んでいこうというものであった。これらの下に、テーマは、就学前教育、学校教育、成人教育を横軸に、家庭(家族)、学校、地域を縦軸に、互いに関連を持たせて構成された。13回の中、第1部(第1回～第4回)は、家庭を基盤とする就学前教育についての考察、第2部(第5回～第8回)は、第1部を受けて、学校教育について、さらに、第3部(第9回～第11回)は、地域社会と教育との関わりを主題とし、最後の2回(第12・13回)は、この講座を総括し、テーマをめぐる今後の課題と

展望についてシンポジウム形式でまとめられた。

各回とも、聴取者の身近な問題として受けとめ易いよう配慮された。例えば、子供たちが伸び伸び学び、活動する学校を実現した小学校。中退者や登校拒否児をも受け入れて、創造的な学校を作り出した高校。図書館活動全国一、オケクラフト工房、炭焼き、山神太鼓など、生涯教育の実践で成果を上げている置戸町。現地での生の声を取りながら、日常生活に於ける生涯教育の課題にも触れた。これは全国的な生涯学習ムードの盛り上がりの中で、番組としても興味を持たれたように思う。しかし、テーマによっては、第7・8回の「真の学力をつくる授業」のように、それが成り立つ原則と内容の説明の場面で、ラジオメディアの制約に突き当たり、苦戦を強いられたものもあった。

今年度の番組制作上の特徴といえば、局側と大学側との間に、全体を通しての中心テーマについて、20回を越える打合せが行なわれたことである。このことは、とりわけ教育の現状が、行政面でも現場的にも、問題が実に流動的であったからともいえるし、また表現上の問題も含めて、講座の体系を整えるため討論を重ね、相互の内容を確認し、その方向づけにかなりの時間をかけたからではないかと思う。収録開始前に、講師との最終確認やスタジオ見学の日を設けたため、具体的制作にかかってからの作業は順調に進んだが、内容的には、教育をテーマとした点の難しさを痛感した。

今後の問題としては、少しでも多くの聴取者を確保するため、番組宣伝を含めたバックアップ体制（道教委など）を固めたいと思う。

昭和63年度 北海道大学放送講座視聴率及び聴取率等

1. 2. 8
北海道放送 事業局調査部

テレビ講座：北海道経済の地平をさぐる (放送期間 63.10.9 ~ 1.1.15)
毎週日曜日 午前 5:45 ~ 6:30

今回 (63年度) 平均 0.3% (6,360 世帯)
前回 (62年度) 平均 1.9% (38,570 世帯)
前々回 (61年度) 平均 1.7% (34,500 世帯)

テレビ世帯視聴率 (63.10.9 ~ 1.1.15)

区 分	おはよう どさんこ体操 (前番組)	北海道大学 放送講座 (5:45 ~ 6:30)	JNN おはよう ニュース&スポーツ (後番組)
第1回 (10/9)	- %	0.1 %	2.8 %
第2回 (10/16)	-	0.2	2.8
第3回 (10/23)	-	0.4	1.8
第4回 (10/30)	-	0.7	2.1
第5回 (11/6)	-	0.5	2.3
第6回 (11/13)	-	0.5	3.0
第7回 (11/20)	0.5	0.7	1.9
第8回 (11/27)	-	-	2.2
第9回 (12/4)	-	-	1.9
第10回 (12/11)	-	-	0.9
第11回 (12/18)	-	0.1	2.5
第12回 (12/25)	0.5	0.8	3.2
第13回 (1/15)	-	0.5	2.2
.....
~13回平均~	0.1 %	0.3 %	2.3 %

(テレビ視聴率：1%=21,200世帯)

ラジオ講座：豊かな人間性の創造

(放送期間 63.10.16 ~ 1. 1.22)
毎週日曜日 21:00 ~ 21:45

今回 (63年度) 0.3% (エリア内聴取人口 15,000人)
ラジオ聴取率 前回 (62年度) 0.1% (エリア内聴取人口 5,000人)
前々回 (61年度) 0.3% (エリア内聴取人口 15,000人)

ラジオ聴取率 調査日：63年12月4日 (日)

区 分	思いつき 歌謡曲 (前番組)	北海道大学 放送講座 (21:00~21:45)	スクリーン Soundフルバ (後番組)
全 体	1.4	0.3	0.2
男 性	1.9	0.6	0.2
女 性	1.0	-	0.2
12~19才	4.4	-	1.1
20~24才	4.3	4.3	-
25~34才	1.1	1.1	1.1
35~44才	1.6	0.8	-
45~59才	-	-	-
12~19才	1.1	-	1.1
20~24才	-	-	-
25~34才	0.9	-	-
35~44才	1.6	-	-
45~59才	0.8	-	-
給料事務	-	-	-
給料労務	3.1	0.8	0.8
商工自営	1.1	-	-
女子有職	0.5	-	-
学生・生徒	2.6	1.0	1.0
家庭婦人	1.4	-	-
ドライバー	1.1	0.6	0.2

エリア内人口 6,579,000人・ラジオ好適人口 (12~69才) 5,085,000人